

レッドリストの意義は失われていない

The Red List still matters

Nature Vol.455 (707-708) / 9 October 2008

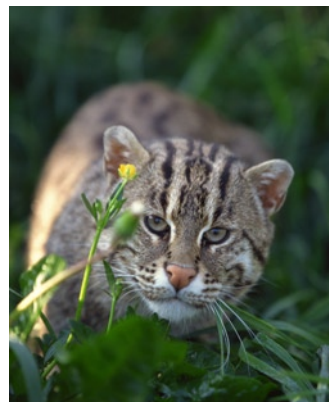
それに、国際自然保護連合は絶滅危惧種に関するデータ以上のものを提供している。

世界的な環境保護団体として最も長い歴史をもつ国際自然保護連合 (IUCN) も今年で設立 60 周年を迎え、正式に老舗の団体の仲間入りである。よく知られている IUCN のレッドリスト (絶滅に瀕した生物種の一覧表) は、確かに、2008 年の今にあってはいささか古びたものにみえるかもしれない。結局のところ生物種は孤立しては生存できないというのが、生態学の教訓なのだから。生物種の進化と存続には、周辺のその他の生物種との関係が関わっている。最近の自然保護運動家は、生物種ではなく、生態系という単位で話をすることが多い。

このようにより広い視野で思考される現在の傾向は、IUCN でも認識されている。4 年ごとに開かれる IUCN 主催の世界自然保護会議が、10 月 5 日～14 日、スペインのパルセロナで開催され、6 日には、1963 年以来継続して作成され、現在では約 4 万 5000 種が対象となっているレッドリストの最新版が公表された。しかし、IUCN はこのほかにも、より広範な観点から哺乳動物を評価した資料を作成し、例えば、海洋動物や南アジア・東南アジアに生息する陸生哺乳動物の状態が最悪であると指摘している。この種の情報こそ、十分とはいえない自然保護予算を有効に活用する上で役立つであろう (右ページ参照)。

IUCN は、気候変動の結果として将来的に絶滅の危機に瀕する可能性のある生物種を予測するプロジェクトにも取り組んでいる。特定の環境を必要とする生物種や分散しにくい生物種が、非常に大きな影響を受ける可能性が高い。また、IUCN はロンドン動物学協会と共同で、そのほかにも絶滅の原因となりそうな脅威を取り上げて、類似研究に着手している。

また、IUCN は、地中海性気候を模したさまざまなバイオーム (カリフォルニアや南アフリカの気候のものを含む) の共同研究を調整する任にあたる「Global Mediterranean Action Network」の創設を発表した。加えて、IUCN の Valli Moosa 会長は、公海上の生態系についても自然保護の網をくまなくかぶせることを目的とした、公海の管理方



熱帯アジアの沼沢地や森にすむスナドリネコ (*Prionailurus viverrinus*)。生息環境の悪化などにより、今回、絶滅危惧種のランクがVU (絶滅危惧II類)からEN (絶滅危惧I類)へと上がってしまった。

法に関するビジョンを示した。ほかにも、より環境にやさしいホテルづくりにはじまり、「環境サービスへの対価」を評価する有効な法体制とはどんなものかを模索するなど、IUCN が取り組むプログラムはさまざまである。

それでも、IUCN の核心はレッドリストだ。そこにながしかの欠点があるにせよ、「過去 4 年間に私たちが絶滅させてしまった生物種の数」という、たいていの人々の直観に訴える測定基準を用いたこのリストが、地球環境の健全性を表わす指標として欠かせない存在であることは、ほとんどの人々が認めるところだ。ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals) の起草者が、生物多様性の損失がどの程度押しとどめられているかを示す尺度としてレッドリストを選んだことは、驚くにあたらない。

もちろん、未発見の生物種の数に比べれば、明確に研究や測定の対象となっている生物種の数はたいしたものではない。この点については、IUCN は、哺乳動物の調査を較正点として用いる 1 つのサンプリング法を使って、無脊椎動物などのまだあまり詳しく研究されていない生物群の現状について推測するプロジェクトを始動させている。

生物多様性を保護するには、レッドリスト以外にも相当に大きな努力が必要であることをはっきりと理解しつつ、なおレッドリストへの投資を続けている点で、IUCN は称賛に値する。確かに、生態系は、単にパーツの寄せ集めである以上の複雑性をもっている。しかし、人々に自然保護の重要性を納得させる方法として、人間のしくじりによって絶滅に追い込まれている生物種を指摘すること以上に、心底訴えかける方法はないのかもしれない。東南アジアに生息するスナドリネコ (*Prionailurus viverrinus*) は、ほぼ絶滅状態になった。そうした情報を読んで心が痛めば、それはよいことだ。昨今の激動する経済情勢にあって、「生態系サービス」の価値をどう評価するかはいまだに議論が続いているし、また、生態系の全容解明にはなお数十年を要する見込みだ。そのなかで、「絶滅」が感情に訴えかける力を軽視することはできないのである。 ■